教員を振りむかせた先にあるもの

京都大学附属図書館雑誌情報掛
坂本　拓

2012.10.11　@京都大学リサーチアドミニストレーション研究会
(内容は全て個人の所感に基づくものです。)

学内の人的リソースの連携

- 研究者　&　研究者
- 研究者　&　図書系職員
- 事務系職員　&　図書系職員
- 学生　&　職員

動機

前の職場で目にした光景・・・

- 研究室の床で寝る教授。
- 終バスで疲弊しきっている教授。

→　教育・研究以外の用務での消耗が激しさ。

大学の構成員の目的はおなじ

- 人類の知を進歩させたい。
- より良い社会にしたい。
- より強い日本にしたい。
- より美味いビールが飲みたい。

etc

研究者の観察

- ひたすら、忙しい。

- 「研究」に関して、必要な知識が欠けていることも・・・

「研究に必要な知識」

- 研究主題に関する知識
  →学会、学術雑誌という確固たる手段。

- 研究で用いるツールの知識
  →友人、先輩等から伝え聞くという不安定な手段。

この欠如により、研究の大きな遠回りをしてしまうこともある。
→　研究者 & 研究者以外　のつながりの必要性。

「お見合いおばさん」の不在

- 研究者＆研究者は、世話をしてくれる人がいる。
- 研究者(教員)＆職員、　職員＆職員　は、自力でくっつくしかない。

教員に振りむいてもらうには、
自分が「濃く」なるしかない！

「濃く」なっていった過程
～教員を振り向かせるまで～

- 教員は、「自己満足」には時間をくれない。

↓

具体的に「どれだけメリットがあるか」を理解してもらえる提案をする必要。

↓

そのためには、先ず教員を理解するために時間と労力を割く必要。

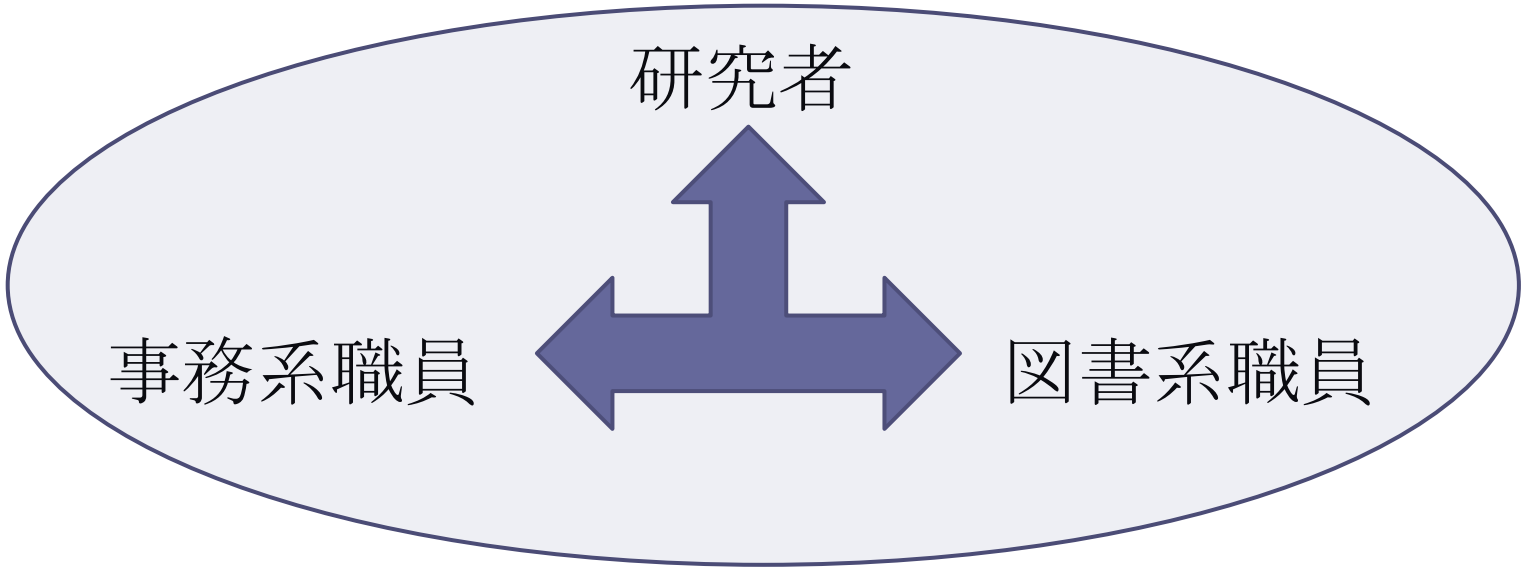
教員を振り向かせたあと
～教員の領域への「越境」～

- ゼミの時間を頂戴しての、データベース・文献検索の講義

[メリット]

1. ゼミの新入生に教員が教える手間を軽減
2. 教員自身も最新のツールの情報を入手

異なるフィールドへの「越境」が新しい力を生む



KURAがこれになれないか!?